
1970年

幼児教育を考える

藤村 哲



私は、開園後まだ日の浅い保育園につとめている。そこでの子どもたちの動きの中にいて、子どもたちへの驚きと、子どもをとりまく社会の種々相に対するとまどいと、教育の場としての保育所の貧しさへの困惑などが交錯した複雑な気持で、日々を過ごしている。

そのなかから、私なりに、幼児教育というものを考えてみたい。私は最初に就職をしてから、十数年を社会福祉の分野にいて、そのうち比較的長い期間を、よき師を得た喜びを味わって、心身に障害をもつ子どもの施設で過ごした。

社会が経済成長をその目標にしているとき、その社会が必然的にもつ価値への尺度は、経済生産性である。そのなかで、障害をもつ子どもたちが経験した差別は、生産活動の駒となり得ないというこのために、おそろしいまでに谷深いものである。とくに

知能に障害のある場合その差別観は深い。たしかに人間は、その知能のゆえに、文明をきずき、文化の創造とその蓄積のなかに人間の生存と生活を支えてきた。人類の文化を創造し、向上発展させる諸能力の中心となるものが知能であると理解される場合、知能の優劣が人間の価値観の尺度となる。知能の低いということが、人間として価値的に低いとみなされるのが一般である。

その親は、知能の差をなんとかして埋めたいと、狂奔する。そして不可能を知って絶望し、死を思いつめることも多い。人よりどれだけすぐれた能力をもっているかということだけが、人間の価値評価の基準になるような社会では無理もないことである。そんな親たちが、やむを得ず施設に子どもを入れる。(実は施設の絶対数の不足している現状ではむしろ恵まれたことなのだが)そして、自分の子どもだけが不幸なのではないということを知

り、さらに子どもの育ちとともに、たとえその子どもがどんなに重症であつても、その生命の尊厳と、だれととりかえることもできない個性的な自己を実現しつづけようと努力していることを共感できるようにするのである。

このような子どもたち、親たちと対しているとき、理念としてさまざまな差別を克服すべきであるとかわかつていても、そんなものの根の浅さを恥じる気持がわいてくるのである。とくに生まれながらの能力のちがいがもたらす差別観を克服するという課題に向かうとき、この子どもたちをみる私たちの眼が、どのように育つかということが、自分自身との対決として問題になる。

私たちは、この子どもたちに対する教育を語るまえに、自分自身を告白することになる。そしてさらに、この問題は、およそ教育の名において単なる文化財の伝達をもって足れりとする立場を越えて、教育がその底に人間の教育について掘り上げられねばならないことを知るのである。

ところで、こうして、障害をもつわが子を、精神的にもしっかりとつけとめることのできた親は、みずからが幸といい、不幸というものの意味を考え、やがて、魂の深奥に人生の意味を求めめるようになる。しかも、その働きは、自分だけに止まるのではなく、必ず社会への働きかけにまで高まっていくのである。障害児のことなど、全く考えることのなかった社会に、懸命に働きか

け、この子どもたちの立派な生き方を示すことで、社会の人々に、この子どもたちのことを考えさせるようになるとしたら、それはすばらしいことであらう。現在のような社会の中で、そのことを連带的にとりあげることができるとしたら、社会の変革につながるたいへんなできごととなるに違いない。

このような子どもたちの生活に触れることのできた私には、「保育園の子どもたち」は全くもって驚きである。なんの苦もなく、どんどん育っていく。障害児が、もがき、あえぎ、ずり落ちては再び挑む発達への壁を、いとも簡単にのりこえているようにみえるのである。土遊びをしていても、絵を描いていても、けんかをしていても、時々刻々に新鮮だし、躍動しているし、限りなく美しい。

この上、この子どもたちに何を働きかければよいのかと思ってしまう。この子どもたちの心の育ちを、どれだけ見つめていけるかという澄んだ目を、どうすれば私たちが持てるのかということこそ大事な気がする。

そんなことを思いながら、今の子どもたちをとりまく環境を考えると、一方では暗い気持がしてくるのである。そしてそれが同時に、自分の生きかたへの問いかけともなるのである。一九七〇年代というのは、なんだかたいへんな時期のようである。今ま

でよりも、もっともつと奇妙な、そしておそろしい時代に突入したという感じがする。

一人の人間の営みが無視されてしまうような社会、画一化され、平均化されたロボットの集団のような社会。そのなかで、消費生活はますます拍車がかかるというし、都市に渦まく人間の奔流はますます増大し、そのかもし出すドロドロした問題は、今まで以上に一息ごとにわれわれを圧しつけるし、また世界の国々の動きが、じかにこの国の動きを規制する度合がよりいっそう強くなるという。

こんなとき、われわれの生き方が、主体性を失ってしまうと、心の目が曇ってしまったたり、創造性を喪失したりしてしまつて、目先のことにひきずり廻されてしまうことになる。

一方、教育の場は機構的にやたらにふくれ上がっているが、そのなかで、教育をうければうけるほど、人格的に分裂をおこしてしまふというばかげたことが、いまの教育の場には多いようである。

そして、いつのまにか、社会の現状に妥協して、現状にあうような便利な人間を育てるという役割を教育がなくなってしまつていく。一つの教育の場が、次の教育の場への階段となつてしまつていく。幼稚園は小学校の、小学校は中学の、中学は高校の、さらには高校は大学へのという有名さへのあこがれの土台にすぎなく

なつてしまうようなあり方が、それを深めへひきずりこんでいく。たしかに、有名校の出身者が、社会的にもよい地位を得、経済的にもゆたかな生活が保障されるとしたら、自分の子どもは、その列車にのせてやりたい、それこそが親のつとめ、と目をつり上げる人々が多くなつてしまふのもやむを得まい。その結果は、次の学校への試験に合格することがすべてになつて、そのくり返し、そのなかで、その子どものもつ個性的なものが、否定されつづけていくことになる。

このことは、今までにもいろいろな機会に、多くの人々が指摘してきたことであるが、今もつて変わらばえのしないことに、社会の病根の深さを思うのである。

障害をもつ子どもたちの親は、その子どものもつ障害のゆえに、悲しく、不幸を味わう。そして、その苦しみに耐えぬいたとき、はじめて、わが子の生命を実感し、その愛が昇華されて、人間のもつゆたかさ、尊さを理解するのである。しかもその人間の尊厳を識る心は、わが子に対するだけでなく、すべての人間へと普遍され、深まりと広がりをおぼせもつものになつていくのである。

ところが、幸いにも障害をもつことなく生まれた子どもへの愛は、それが当然だと考える親たちの、ともすると歪んだ期待へとおきかえられて、子どもを個性喪失という異常な状態に追いやつ

てしまうことに、皮肉なものを感じないではいられない。

このように考えてみると、親が子どもを、あるがままにとらえて、全人格的に愛すること、そのことの意味をもう一度、じっくり考えなおしてみたいと思う。

そして、ますます核家族化していく将来であっても、人間の生活のなかで、家庭のもつ機能はなくなるはずもない。社会的な不安が、家庭にもちこまれて、家族エゴイズムに凝結した結果が、子どもへの不当に投機的な教育への期待となって、子どもの情緒的な安定をさまたげるような崩壊家庭にならない注意が大切であろう。

ところで、わが国の経済は、驚異的に飛躍したという。だが、それが世界の水準に迫り、あるいはそれを抜くものであっても国民の生活は、さまざまな形で、貧しさと根深い不安を味わい、所得の格差はさらに大きくなりつつある。このような中で、経済効率優先が、わが国の教育や福祉を、経済の成長に比して著しく跛行的にしている。

このような事実を、私は、保育所という現場であらためてみせつけられた思いがする。婦人の就労はますますふえている。その背景については、ふれるいとまがないが、婦人労働とよべるほどには確立されてはいない。パートタイム的に、しかも低賃金のもが多い。その子どもたちが、保育に欠けるということを前提に

して保育園に入っている。だがその「欠ける」という状況を補うものとしては、保育行政の現状はあまりにも貧しい。

設備の面でも、子どもたちに対する保育者の数の上でも、八時間から十時間、あるいはそれを超える長時間の保育をささえるためには乏しいものである。

しかし、たとえそのような状況のなかでも、子どもたちは、仲間たちともみ合いのなかで、たくましく、心ゆたかに育つのである。子どもたちは、本来、輝かしい生命を育む力をもっているものである。私たちは、ともすれば、その輝きを曇らせてしまうような、社会の種々相のなかで、子どもたちのゆたかな心をみつめながら励ましつづけたい。そして、その子どもたちが拓く、明日を信じたいと思うのである。

子どもたちのひとりひとりが、个性的に、自己実現をしようと努力しつづけること、それが、子どもたちが未来へとつなぐ生命を生きることであるし、そのことを子どもたちと共感し合いたいのである。

そのことが、くり返し問いつづけられることこそ、子どもたちに接する者にとって、いつも新しい課題なのである。

(村山苑つばみ保育園長)